

XXXXXXXX ①

はじめに

AI時代の挑戦と和争の必要性

四つの相関的思惟



AI時代の二重の危機

- 内部：大量解雇の危機に直面
- 外部：米・イラン戦争など戦争の極大化
- 和諍による相生と連結が生存の課題

要点

人類には答えがある

- ゲーデルの不完全性定理
- 完璧な論理も欠陥を免れない
- 残る鍵はその方法の発見

相関的思惟による再確立

- 全体をまず見る相関的思惟
- 立体・循環・共感・融合
- 確証バイアスなど分析の誤りを補正

和諍の発展と本書の構成

- 二項から三項・四項へ発展
- 四つの経済理論の衝突に対応
- 第1部理論編・第2部応用編

XXXXXXXXXX ①

1. 序論

AI時代の根本的な問いと新たな思惟の必要性

AIの発展と人間の未来：倫理的課題と政策的対応 . 序論

四つの相関的思惟



AI時代の根本的な問い

- 問いは技術より人間についての問い
- 人間は意味を作る総体的存在
- 相関的思惟＝連結を共に見る思考

技術的特異点の敷居、人間の座

- AIが創造・意思決定へ深く浸透
- 「何が人間を特別にするのか」
- 選択する存在から選択される存在へ

分析的思惟の限界と相関的思惟の台頭

- 分析的方法が複雑な問題に限界
- AIが既存の亀裂を増幅・可視化
- 東アジアの相関的思惟が代案

研究の目的と方法

- 道・仏・儒・西教の四段階の枠組み
- ミメーシス・ミュトス・ロゴス・テオス
- 東西思惟の統攝を志向

1. 序論

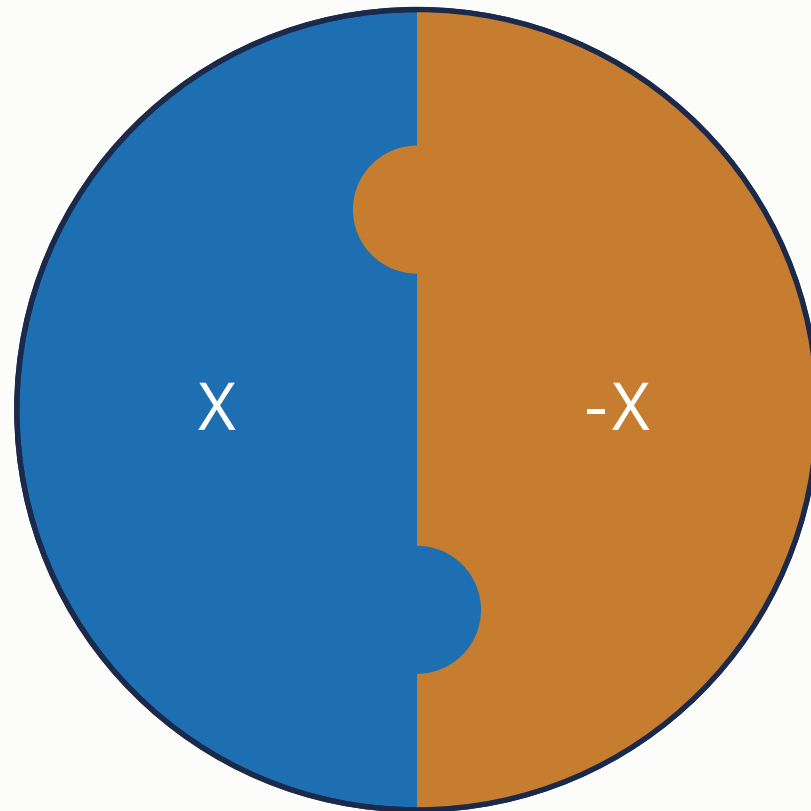
特徴	分析的思惟（主に西洋）	相關的思惟（主に東洋）
主要な推論方式	還元主義的、ボトムアップ	総体的、トップダウン（または全体優先）
部分と全体の関係	部分を通じて全体を理解（部分の総和＝全体）	全体の中で部分を理解（全体は部分の総和より大きい）
因果関係の処理	線形的、直接的な原因・結果	ネットワーク化された、共鳴的、相互的な影響
脈絡の処理	脈絡から切り離して分析	脈絡依存的、脈絡が意味を規定
論理の活用	形式論理、演繹／帰納論理	類推論理、隠喩、象徴
変化観	線形的、予測可能（または幾何級数的）	循環的、変形的、螺旋的
曖昧さに対する態度	明確性を選好、曖昧さを回避	曖昧さを受容、逆説を包容
主要な目標	予測、統制、効率性	調和、適切性、均衡
中核となる関連概念	科学的方法論、データ分析、客観性	陰陽、五行、感応（感應）、気（氣）、縁起（縁起）
強み	精密性、明確性、特定問題の解決能力、技術発展の原動力	複雑系の理解、意味の創出、適応性、長期的観点、倫理的洞察
AI時代の限界	システム的問題、倫理的ジレンマ、意味の喪失、人間疎外への脆弱性	定量化および即時的予測の困難、科学的検証の伝統的な困難（現代科学との接点を模索中）

XXXXXXXXX ①

2. 相関的思惟の第1の方法 — 立体（立體）

道教的ミメーシス（Mimesis）：Xは-Xであり、-XはXである

相補性：Xは-Xであり、-XはXである



立体的思惟の定義

- 一面だけで結論を下さない力
- 思考の箱を回して見る能力
- 身体・感情・直観に根ざす深層理解

道教的ミメーシス

- X は $-X$ であり、 $-X$ は X である
- 対立項の相互依存と相補性
- AIと人間は相補的關係・互いの鏡

無為のリーダーシップと胞胎

- 無為 = 自然に逆らわぬ導き
- AIを鏡に人間社会を省察
- 胞胎 = 可能性を守り育てる役割

AI時代の造化と調化

- 陰陽合徳による調和の原理
- 技術（陽）と人間性（陰）の融合
- 対立でなく互いを完成させる対

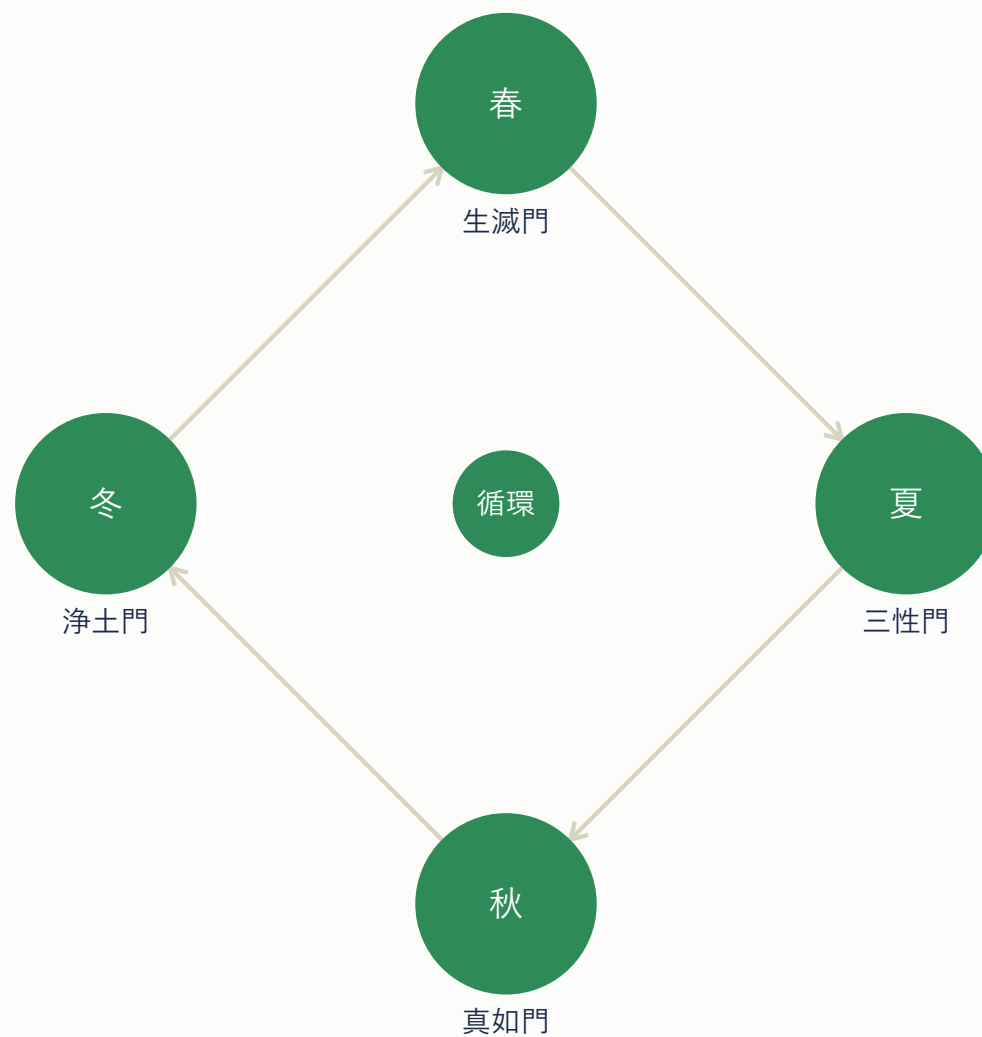
☒☒☒☒☒☒☒ ①

3. 相関的思惟の第二の方法 — 循環（循環）

仏教的ミュトス（Mythos）：Xは-XでもXでもない

AI☒☒ ☒☒☒ ☒☒☒ ☒☒☒ ☒☒ ☒☒☒ ☒☒☒☒ . ☒☒☒

四つの相関的思惟



循環的思惟の定義

- 世界は直線的にのみ動かない
- 成長と衰退・失敗と回復の循環
- 陰陽五行の循環と偶然性の包容

仏教的ミトス

- Xは-XでもXでもない
- 縁起・無常・空の思想
- AIと人間の共進化と共同責任

生命の具体化、形体

- 形はあれど実体なき寂滅の空間
- クオリアと直観＝人間固有性
- 身体化された認知の重要性

成長の第二段階、養生

- 精神が身体を得る存在論的飛躍
- AIが経験できぬ身体性の獲得
- ともに行う養生＝相生連結経済

比較

3. 相関的思惟の第二の方法 — 循環（循環）

区分	人工知能（AI）	人間
認識／思考	・ 抽象的情報処理および論理的推論が可能 ・ データに基づく学習と知識蓄積 ・ パターン認識、問題解決、意思決定の支援 ・ 入力情報に応じて処理方式が異なる	・ クオリア（Qualia）経験、志向性（Intentionality）による意味付与 ・ 自己省察および自我意識 ・ 直観的創造性および想像力
感情／共感	・ 感情の認識およびシミュレーションが可能 ・ 真の感情経験は不在	・ 真の感情経験 ・ 共感および連帯の能力 ・ 関係と愛による存在の形成
存在論的地位	・ 機能的存在、道具的存在 ・ プログラムされた応答、シミュレートされた結果 ・ 「属性」の領域における強み	・ 「現存在（Dasein）」として存在を問う存在 ・ 身体と精神の統合的经验 ・ 「実体」的存在 ・ 不完全性および成長可能性
倫理／責任	・ 倫理的判断が困難 ・ 責任の所在が不明確 ・ 学習データの偏りの反映	・ 道徳的良心および自由意志 ・ 責任ある意思決定 ・ 人間の尊厳の尊重

3. 相関的思惟の第二の方法 — 循環（循環）

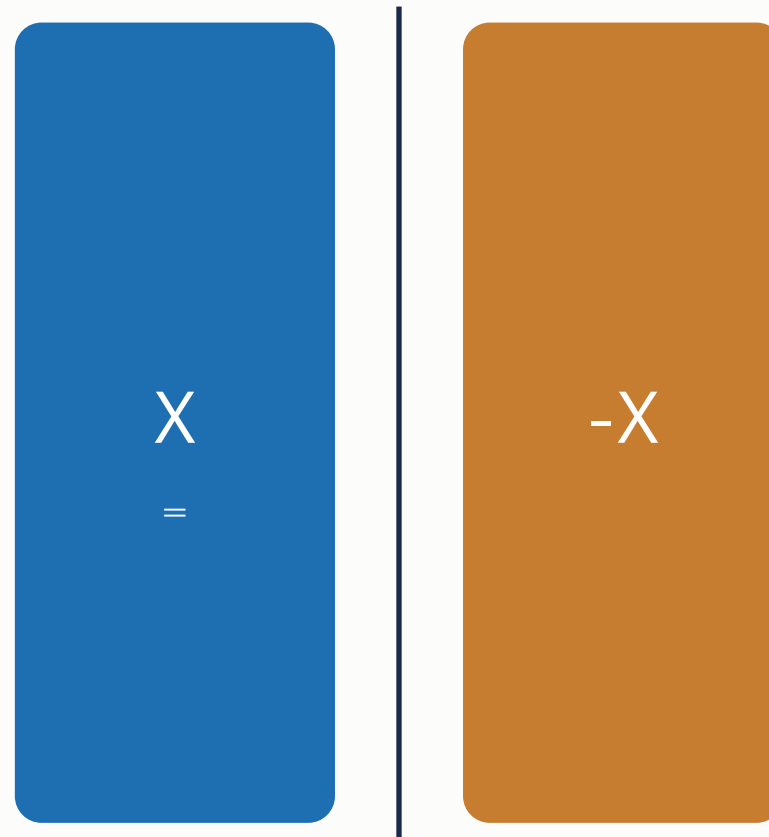
区分	仏教（大乘唯識学の観点を含む）	儒教（修身齊家の観点を含む）
身体の本質	・「私は身体ではない」という修行の核心（脱同一化） ・同時に、業を消し輪廻から抜け出す「唯一の道具」としての肯定的側面 ・肉体－心の連続体 ・阿頼耶識の執受（執受）を通じた生命維持	・父母から受けた大切なもの（身体髪膚 受之父母） ・身と心の一致（心正而后、身修） ・知的経験の実践的土台（体験、体得）
身体役割	・霊的進展と解脱の必須の媒介 ・「識（識）」から成る知的な次元、人間と動物を区分	・「修身（修身）」の根本 ・家庭、国家、天下を治める基盤 ・知行一致（知行一致）の実践的証明 ・自己尊重と他者尊重の拡張
AI時代への示唆	・AIの非身体的存在との対比、人間の「経験」と「意識」の重要性の強調 ・ポストヒューマン時代の身体操作をめぐる議論への哲学的基盤の提供	・AIの知的能力と対比される「身体化された知恵」と「実践的倫理」の価値の強調 ・「人間らしさ」を強化する修身齊家の現代的意義の再発見

①

4. 相関的思惟の第三の方法——共感（共感）

儒教的ロゴス（Logos）：XはXであり、-Xは-Xである

共感：関係と役割を正す



共感的思惟の意味

- 共感は世界を変えた革命の動力
- 西欧が儒教の仁・恕を借用
- 関係の温度を読む力・共感経済

要点

儒教的ロゴス

- XはXであり、-Xは-Xである
- 名分を正す正名論
- 仁＝相手を自分のように思う心

技術的疎外の恨と関係の技術、凡節

- 技術的疎外が生む新たな恨
- 恨解き = 疎外集団を招き入れる
- AI時代の凡節・共感資本・信頼

浴帯と善悪の分別

- 倫理的アイデンティティの確立
- 共感を通じた善悪の分別能力
- AIと人間を分かつ最終防衛線

4. 相関的思惟の第三の方法——共感（共感）

区分	カント（西洋）	仏教（東洋）
道德原理	・義務感、理性的当為の強調 ・憐れみによる助けは道德とみなさない ・最高善の実現のための「要請」（靈魂不滅、自由、神）	・縁起（縁起）と空（空）の思想 ・慈悲（慈悲）と無我（無我） ・あらゆる存在の相互連結性
共感の概念	・直接的な「共感」より「義務」と「尊敬」に基づく道德的行為の強調 ・「要請」は実践理性の必要性に応じた概念	・「慈悲」を通じて他者の苦痛に共感し和らげようとする実践的態度 ・すべての人が変化する存在であると理解することによる共感能力の向上 ・葛藤解消の容易さ
AI時代への示唆	・AIの非感情的特性を考慮し、人間の「理性的倫理」の限界と超越的価値の探索が必要 ・AIの判断の偏向性の問題に対する「規制的原理」設定の重要性	・AI時代の「関係的知能」と「相互依存性」の重要性の浮上 ・AIの不完全性を認め、人間の「精神的超越」と「内面的省察」を通じた生存戦略

4. 相関的思惟の第三の方法——共感（共感）

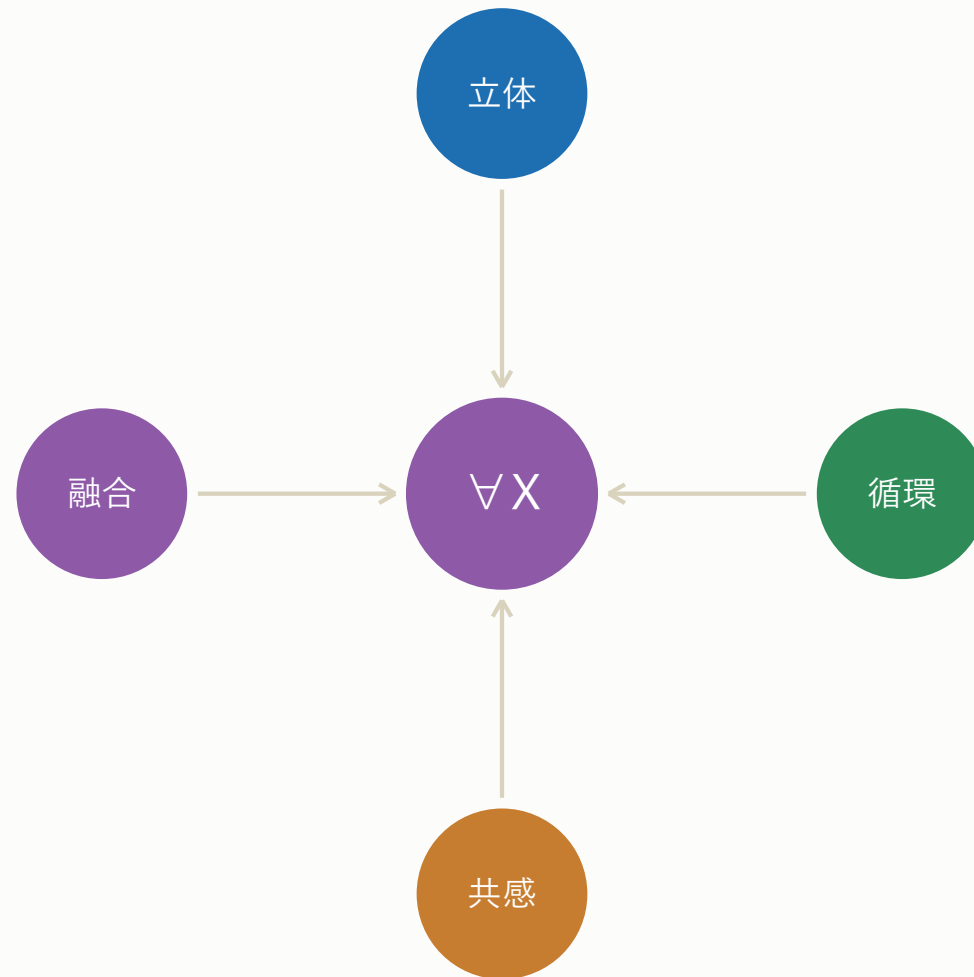
区分	ヘーゲル（西洋）	孔子（東洋）
道德原理	・ 弁証法的自己実現（正・反・合） ・ 矛盾を発展の原動力と見る ・ 倫理的生の段階（家族、市民社会、国家）	・ 仁（仁）、礼（礼）などの道德的徳目の強調 ・ 修身（修身）を通じた自己完成 ・ 自己省察と実践の強調
共感の概念	・ 「愛」を通じて孤立的存在を避け、私と他者の統一された自己意識を形成 ・ 弁証法的過程を通じた関係の省察	・ 「仁（仁）」の核心として「惻隠之心」など共感能力を内包 ・ 「共感」を通じて他者の意味を投影するシステムを所有
AI時代への示唆	・ AIと人間の「矛盾的關係」を「発展の動力」として理解 ・ AIとの協働を通じた「総体的」問題解決能力の強調 ・ AI時代のリーダーシップに必要な「關係的」理解と「疎通」の重要性	・ AI時代の「人間らしさ」の核心として「共感」と「人性教育」の再強調 ・ AIが代替できない「温かい心」と「共感力」のリーダーシップ

①

5. 相関的思惟の第四の方法——融合（融合）

テオス（Theos）：Xはすべてである（ $\forall X$ ）

融合：すべてを一つに ($\forall X$)



融合的思惟の定義

- 異質な長所で新たな秩序を作る
- 統摂＝ハイブリッド思想家
- 韓流・ビビム文化の融合例

第四の思想： $\forall X$ 、テオス

- X はすべてである
- アブラハム系宗教の霊魂永生
- 学閥社会の解体と権力移動

新たな人間像：冠旺と兜率

- 冠旺＝AIを統率する指揮者
- AIの能力と限界を知り責任を負う
- 兜率天＝拡張された人間の理想

完成の最終段階、融合

- 四段階完成で文明の設計者に
- 良い問いを立てる人間の役割
- 相生と調和の秩序を構築

5. 相関的思惟の第四の方法——融合（融合）

方法論	核心原理	AI時代の適用
相関的思惟	全体論的、関係的、文脈的な理解	AIの倫理的ガバナンス、人間・AI相互作用の設計、複雑な社会・技術システムの持続可能な管理
限界性の探索	転換期的空間における創造性、柔軟性、新たな総合の出現	AI導入による社会的・職業的転換期の管理、新たな規範および制度の設計、人間・AI協働モデルの実験
構造論	分離された諸要素間の連結の規則性の探索、多様な分野を一貫した論理体系へと統合、情報伝達の形態を重視	複雑なAIシステムの内部作動原理の理解、データ構造および情報フローの最適化、AIベースのシステムの安定性および予測可能性の向上
トリーズ（TRIZ）	矛盾の解消、発明原理の適用、理想的最終結果（IFR）の追求を通じた体系的な問題解決および革新	AIアルゴリズムの限界の克服、新たなAI応用分野の開拓、AI技術の予期せぬ問題の解決、人間とAIの協働を通じた革新的ソリューションの開発
ヒューマンデザイン	古代の知恵と現代科学の統合を通じた、個人固有のエネルギーの流れ・潜在力・意思決定様式の理解	AI時代における個人の強みおよび役割の再定義、個別最適化された教育およびキャリア開発、人間とAIのチーム編成における相互補完性の最適化、個人のウェルビーイングの増進
「ビビム（混ぜ合わせ）」文化	多様な要素（地域的／外来的、伝統的／現代的）の調和のとれた混合を通じた新たな価値とアイデンティティの創出	グローバルなAI技術と地域文化の創造的結合、AI倫理および政策の文化的文脈化、多様な背景をもつチームの協働を通じたAIソリューションの開発

5. 相関的思惟の第四の方法——融合（融合）

東洋的共鳴	西洋的共鳴
陰陽五行、縁起説、中庸	システム理論、複雑系科学、生態学
無極（無極）、虚（虚）、中道（中道）	通過儀礼（Rites of Passage）研究、革新理論における「破壊的革新」の初期段階
河図洛書のパターン認識、五行の相互作用構造	位相幾何学、ネットワーク理論、システムアーキテクチャ
孫子兵法の戦略的思考（矛盾の克服）、易（易）の変化原理の応用	発明学、工学設計方法論、創造的問題解決（CPS）
周易（I Ching）、チャクラシステム、命理学的要素	遺伝学、量子物理学、生化学的個別性
陰陽の調和、和而不同（和而不同）	文化的融合（Cultural Fusion）、ハイブリッド革新

XXXXXXXXXX ①

6. 第1部結論：相關的思惟の戰略

四つの相関的思惟



相関的思惟という基本戦略

- 歴史は絹布、AI革命は新たな糸
- 熟練した織工の技が必要
- 関係的・全体論的思考が基本戦略

四つの思惟の有機的な統摂

- 四思惟は共に回転するエンジン
- 立体→循環→共感→融合の連携
- 一つ欠ければ全体が機能せず

要点

新たなルネサンスに向けて

- 人間固有の力量の価値が高まる
- 機械との競争でなく人間性の深化
- AIは手段、人間中心の価値回復

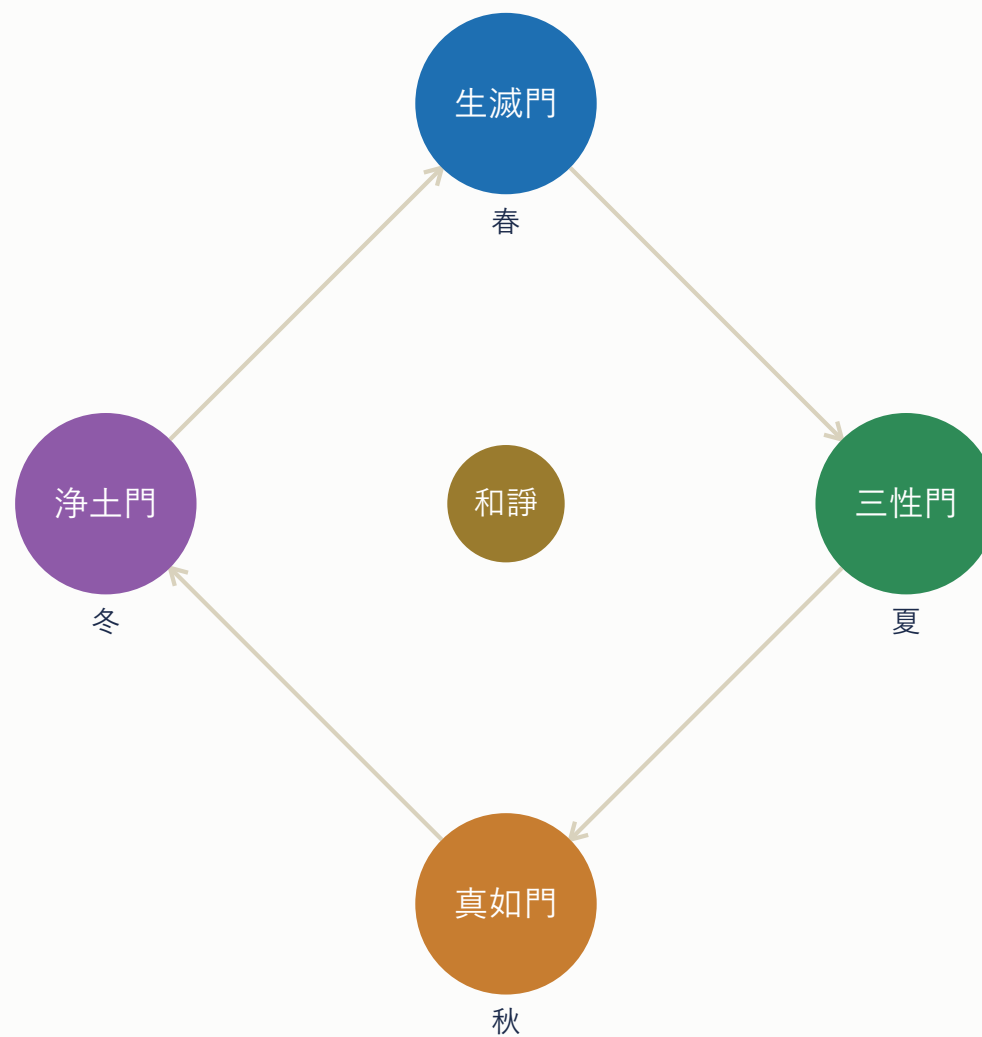
教育と社会的実践の方策

- 「なぜ・どのように」を問う教育
- 「遅い対話」の空間づくり
- 企業はアルゴリズムの偏りを検討

四門（四門）和諍と四つの相関的思惟①

7. 四門（四門）和諍と四つの相関的思惟

四門和諍 ↔ 四季循環



二項和諍と立体的思惟

- 真如門（中観）と生滅門（唯識）
- 一心二門への統合、体と用
- 道教的ミメシスと対応

三項和諍と循環的思惟

- 唯識の三性説への拡張
- 遍計所執・依他起・円成実
- 仏教的ミュトスと対応

四項和諍の完成と春夏秋冬

- 浄土門を加え四門構造へ
- 開合の論理＝開けば四、合すれば一
- 春夏秋冬の循環的秩序に配置

如来蔵・浄土・華嚴・禅宗の大統合

- 異なる伝統も共通の土台を共有
- 本覚＝本来すでに悟りの論理
- 自力と他力の一致・境界の消滅

比較

7. 四門（四門）和諍と四つの相關的思惟

区分	真如門（眞如門）	生滅門（生滅門）
哲学的態度	体（體）——本質的側面	用（用）——現象的作用
主要学派	中觀（中觀）	唯識（唯識）
核心概念	破邪（破邪）——誤った見解を打ち破る	顯正（顯正）——正しい道理を顯す
性格	絶対的平等（空であること）	相対的差別（因縁に従う）

7. 四門（四門）和諍と四つの相關的思惟

従来の二大和諍（起信論）	唯識三性に基づく拡大和諍	和諍の論理
真如門（眞如）	円成実性（圓成實性）	絶対的真理（空でありながら満ち満ちている）
生滅門（生滅）	依他起性（依他起性）	現象的縁起（因縁に従った現れ）
（生滅門の下位）	遍計所執性（遍計所執性）	主観的妄想（打ち破るべき対象）

7. 四門（四門）和諍と四つの相關的思惟

名称	核心的性格	四季への配当	和諍における役割
真如門（眞如門）	絶対的な空（中観）	秋	本質への回帰（破相）
生滅門（生滅門）	現象の生起（起信論）	春	現象の理解（表象）
三性門（三性門）	存在の分析（唯識）	夏	偽と真の弁別
浄土門（浄土門）	慈悲による救済（浄土宗）	冬	実践的な帰依と休息

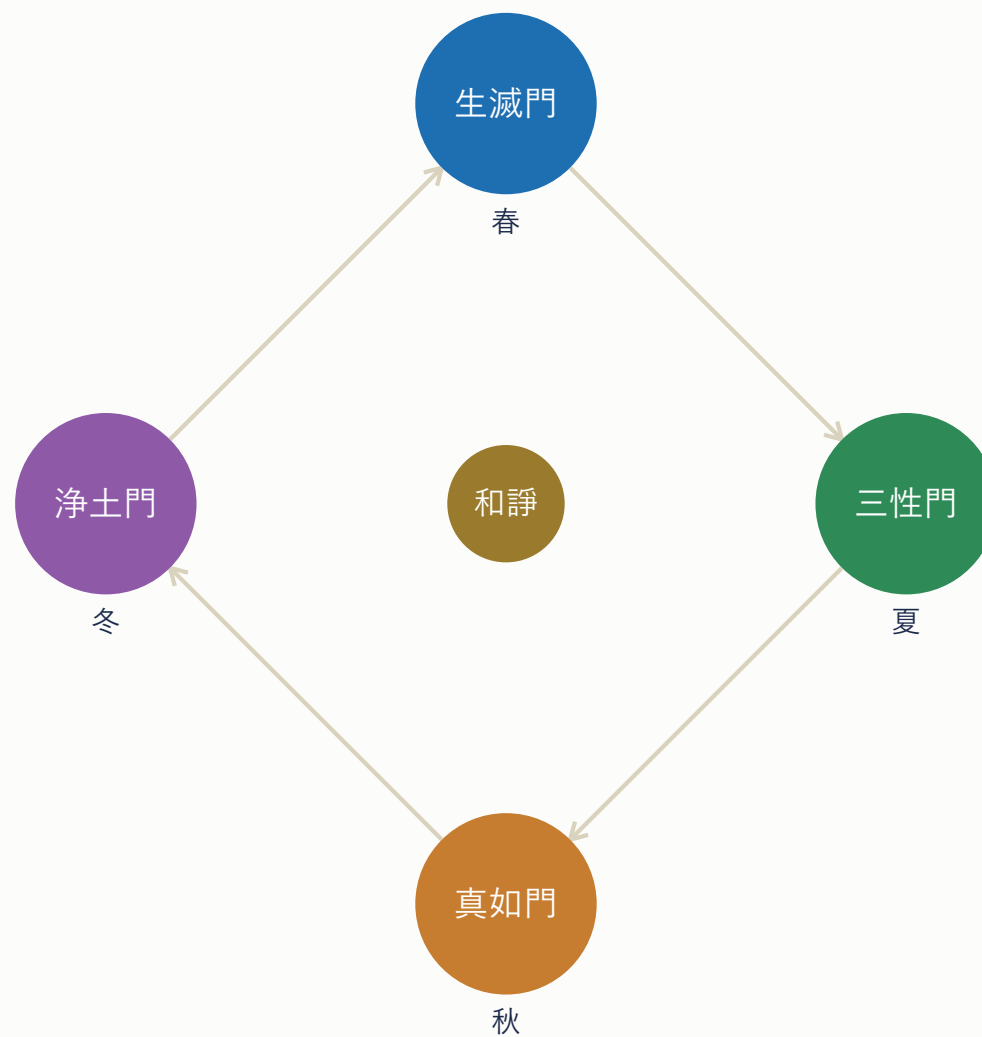
7. 四門（四門）和諍と四つの相関的思惟

季節	門（門）	関連する思想	和諍の核心
春	生滅門	華嚴	一輪の花に宇宙が収まるように（一即多）、生滅する現象がそのまま真理である
夏	三性門	禅宗	妄想（遍計）を一刀のもとに断ち、本質（円成実）を直観する峻烈さ
秋	真如門	如来蔵	あらゆる殻を剥ぎ取り、内面の純粋な仏の種子を確認する
冬	浄土門	浄土	種子を抱き、巨大な慈悲の懷で憩いながら新たな生命を準備する

XXXXXXXXXX ①

8. 元暁の和諍理論と相生經濟の原理

四門和諍 ↔ 四季循環



和諍理論と四つの経済理論

- 十門和諍論 = 部分的真理の統合
- 二項・三項・四項が相関的思惟に対応
- 四経済理論が四門和諍に対応

器と起で見た経済的和諍

- 器（制度）と起（創造エネルギー）
- 自由・効率・公正・連帯の四大エンジン
- 相互補完で対立を解消

要点

和諍の拡大と相生経済

- 現代経済は春に埋没し冬を喪失
- 循環的に統合する和諍経済学
- 一心経済＝相生経済への転換

要点

世界宗教の和諍

- アブラハム三宗教への適用
- 本質を共有し現象で衝突
- 一つの大洋へ流れる水流

比較

8. 元暁の和諍理論と相生經濟の原理

思想	核心原理	四門	季節	哲学的核心
功利主義	最大多数の最大幸福（効率）	生滅門	春	種子の自律的な起（起）——個別の生命力の噴出
共同体主義	共有された価値と社会的紐帯	三性門	夏	器世間（器）の効率的拡張——現象的豊かさの極大化
社会契約主義	合理的手続きと公正な合意	真如門	秋	公正な規則への寂滅——普遍的秩序と理
自由至上主義	個人の絶対的所有権と自由	浄土門	冬	「われわれ」という大きな器の起信（信）——根源的紐帯と一心

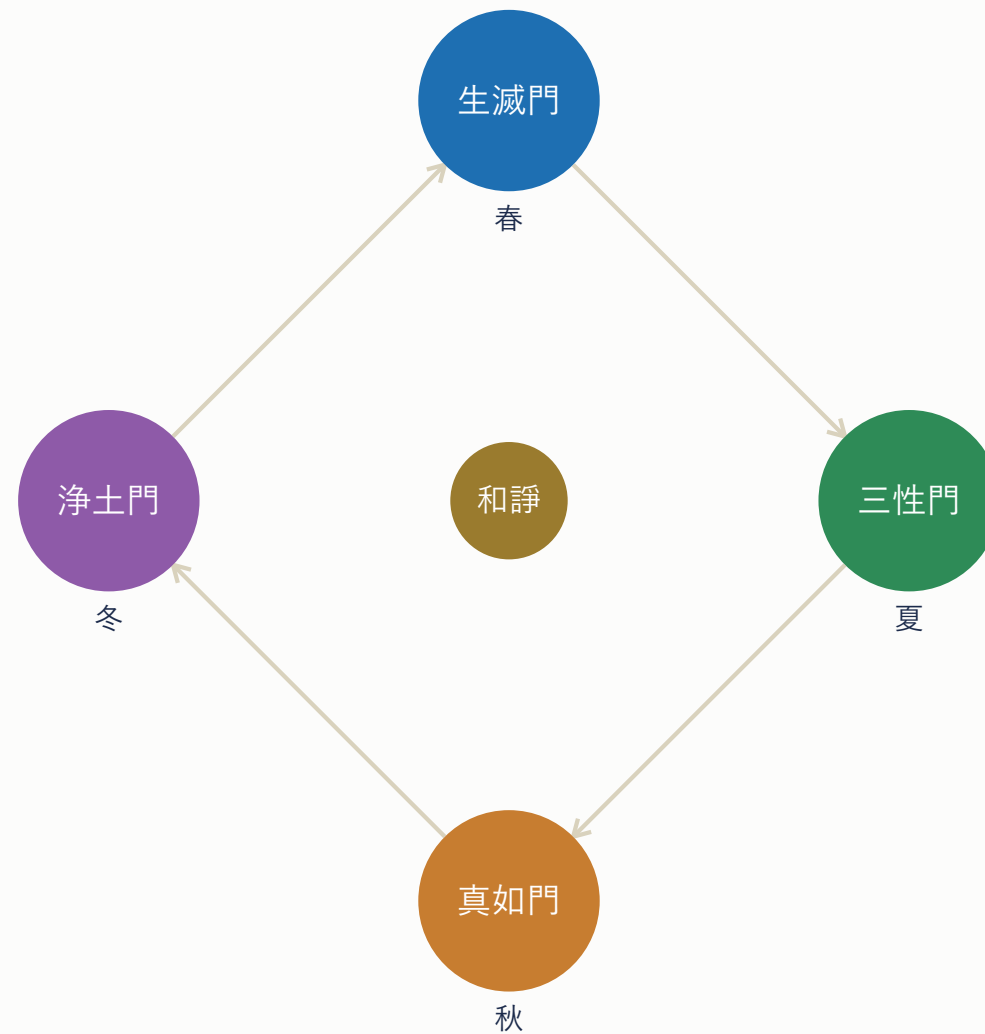
8. 元暁の和諍理論と相生経済の原理

宗教	和諍の季節	核心的強調点	和諍の役割
ユダヤ教	春（法の始まり）	契約と律法の厳格さ（器世間の規則）	共同体秩序の始点
キリスト教	夏（愛の拡張）	信仰と普遍的愛（法器の拡散）	愛のエネルギーを極大化
イスラム教	秋（絶対的服従）	唯一神への完全な献身（寂滅への帰依）	本質への帰還を促す

相互関係の図解①

9. 相互関係経済の実践と展望

四門和諍 ↔ 四季循環



貨幣と近代の危機

- 貨幣 = 自由の宝庫かつ軛
- 循環でしか解けぬ難解な存在
- 経済倫理の喪失と環境危機

四つの実践課題

- 自由と共同体の和諍
- 労働と分配の和諍
- 理念的葛藤の和諍と環境危機の克服

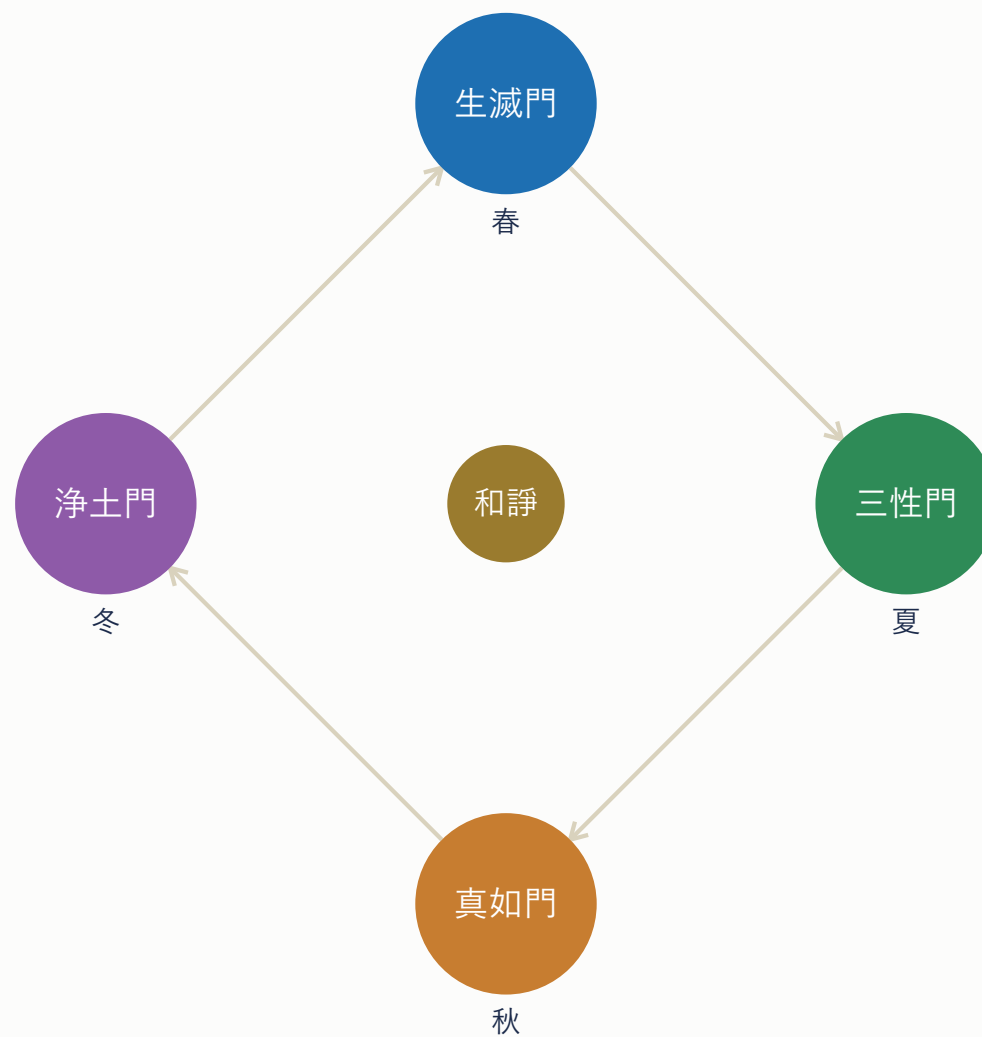
韓国の役割

- 元暁の循環的統合の伝統
- ビビンバ・韓流・儒仏仙三合
- 相生連結経済の実現に寄与

目次 ①

10. 第2部の結論：和諍を通じた相生経済の未来

四門和諍 ↔ 四季循環



研究の総括

- 相関的思惟と和諍を結合
- 第1部：四つの相関的思惟を確認
- 第2部：四門構造を経済理論に適用

要点

和諍のメッセージ

- 異なる観点はそれぞれ妥当
- 消滅でなく高次で相互包摂
- 人類固有の智慧

要点

相生連結経済の未来

- 自由・効率・正義・連帯の統合
- 春夏秋冬のように循環的に統合
- 共に生き残る相生経済へ